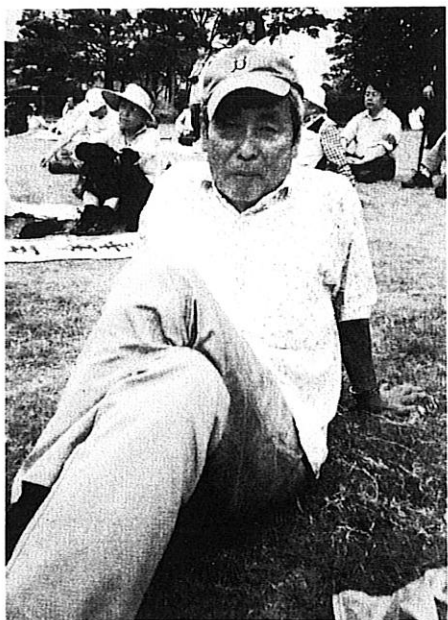


六八年世代の活動家 吉岡史郎（本名：奥田満）さんを追悼する

『情況』二〇二二年11・12月合併号

同志・友人・仲間の皆さん

淵上太郎（経産省前テントひろば代表）



故吉岡史郎（奥田満）さん

吉岡さん！

君と最後に会ったのは一月一三日でした。瓦礫処理の抗議行動でテントが手薄になってしまうので、応援に来てほしいということでした。新幹線にのって大阪に行けばその往復、休養にもなるか、ということもあって出かけたのです。テントにつくと、君は肉体的にはやや元気を欠いていた感じであっただけ—今考えてみると相当に体の方にはガタがきていたでしょう—、人なつっこい笑顔で歓迎してくれて、テントの数やその実態みたいなことを説明してくれました。私は長く続くテントを実際にみて回り、大小一七張りあることを確認しました。そして君はあらかじめビールを何本も用意してくれていて、さっそく飲みながら、大阪市の瓦礫処

理に関する抗議行動の様子などを教えてくれました。また福島にも話がおよび、福島県庁前のどこかにテントを建てることなども淡々と話してくれました。インターネット中継もあって、抗議行動の様子がパソコン画面に写っていました。一時間ほどして抗議のコールが途絶えた時が、四人が逮捕された時だったのでしょうか。テントのほうもちよつとした嵐で、外に喫煙に行つたときに風雨に飛ばされそうなテントを補強したりもしました。

君とのお付き合いはここ五年ほどのことでしたが、君は会議などではかなり控えめで無駄な議論には距離をおいていたように見えました。いつもその後、ちよつと行こうかということで、近所の飲み屋には本当によくきました。経産省前テントでも私より先に適当な飲み屋を一番先に見つけておりました。

君は議論より先に実践という人でした。何か具体的行動ということになると任せてくれ、やることはやるというタイプでした。そしていつもニコニコした人懐っこい態度が運動の成立に大きな役割を果たしてきたと思います。こういうことは誰にでもできることではありません。天性に備わっていたのでしょうか。

そういう君が亡くなるというのは、やや頭でっかちのわれわれの運動には大きな痛手です。二月四日、亡くなる直前に携帯に電話をかけましたが出られませんでした。「憎ま

れつ子世にはばかるといふけど、元氣ですか？」と留守電にしました。私としては励ましの電話でしたが、それを聞くことは多分できなかったのでしょうか。

君の意志を継いで、福島県庁前にテントが張られる趨勢もあります。天国か地獄から「おれはもう、ようやらんが、がんばれやー」といつているように思えます。

（二〇二二年二月）

監視テント H

吉岡さん、突然のことでもまだ信じられない気持ちです。今日たくさん仲間が集まってきました。

ただ、ここに来たくても来れない仲間がいます。福井には川崎さん、大阪にはパオオンさん、ハンさんそして白田さん、悔しくて仕方ありません。

誇らしげに「ロクククライミングのメッカ、小川山に四〇日間いたぞ」と聞いた時、それは凄い！

あのルートはどうだったとクライミングの話は尽きませんでした。

「足が悪いからもう登れないけどな」と少し寂しそうでした。

テントでは、多くの人たちが話をしに訪れました。それを

吉岡さんはおおらかに、「そやな、そうか」とみんな受け止めてくれました。

「現場にきたらええんや、わしら現場主義や。」
私も吉岡さんにまだまだ話しておかないといけなことがいっぱいあります。

私は今年、大飯から北九州、そして大阪市役所横と思えば短い間でした。

とりわけ市役所横での四〇日間は、私の人生の中でももっとも濃密な四〇日間です。

吉岡さん、ほんとにありがとうございました。
さようなら。

監視テント MU

僕が、一月一三日の住民説明会で逮捕され、出てきたその日が、あなたの他界される日と重なりました。あなたは、福島にテントを建てたいから、大阪は僕たち、MUと今勾留中のPさんに任せたいとまで言ってくださっていました。Uさんは、一緒に拘置所に入ったのですから、もう僕は、せっかく出てきてはみたものの、テントは撤収され、今後のことを相談するひとがないことに呆然としました。専従のPさんも勾留中でしたし。

僕は、上から制約をされ、命令されるのが、大嫌い。制限

される闘争なんか、絶対イヤです。ですから党派セクトなんか関係ないんです。でも、オキユパイおおいには、かけつけましたし、それは、ドフリー原則だと聞かされていたからです。大阪に、ドフリーの人たちが、テントを建てると聞いて、いの一番に駆けつけました。オキユパイおおいで、再稼働が止められると感じていたように、大阪市庁のテントで、瓦礫焼却が止められる、止めなきゃと希望を抱いたのです。テントを建て、住み込むのは、同時でしたし、そんな気負いを吉岡さんは、かってくれたのでしょう。

今までの経験で、ロビー活動や署名運動などでは、間に合わないと思断考えていましたので、渡りに船であり、あの日々は本当に思った通りのことができた毎日とも言えます。そんな信念を打ち明けると、吉岡さんは、目を大きく開いて、ウンウンとうなづいてくれました。

「放射能の恐ろしさを訴える人が、タバコを吸ってるなんて、おかしいですよ」と目の前で言うと、そうだな、まったくだと周囲の人全部に聞こえるように、答えてくれました。でも、タバコは捨てられない。テントの外で、不良の高校生のように、小さくなって、うなだれて、隠れて吸われるんです。どんな命令もどんな指示もされず、奥で座って、僕だけでなく、全身耳になって、顔を覗かせる人を歓待し、そのひとのやむにやまれぬ、切羽詰まったようなくちぶりを、穏やかに興味深げに、何とも言われぬ魅力的な微笑さえ浮かべな

を、かしてくださいね！

監視テント quema

吉岡さん

吉岡さんが、影ながら敬愛している私の先生を最後には、認めてくれたので、その先生の言葉をめぐっての夜のことから始めます。

「宗教は民衆のアヘンである、とマルクスは書いたが、アヘンが必要でなくなるとは書いていないのではないか……」

アヘンをめぐって、あの時も、経産省テントの中では、丁々発止と激論の連続でした。そして、アヘン戦争から植民地問題へと果てしない話題が続きました。アヘンが、今や、プルトニウムなんだ、帝国主義と階級闘争から演繹的に考えなければだめだとおっしゃっていたのだと、昨今おもしろいあたりました。おおいの乱と大阪決戦のあとの緊張の中で。

党へのアンビヴァレンツから、やはり、党への愛情の深さをひしひしと感じていました。深く疑うものは深く愛しているからだ、と陳腐なことまでつぶやきながら。

あなたが、経産省テントの中を素早く、あまりに見事に掃除されるので、あなたは、大阪で居酒屋を経営しているのだというのが、お会いして初めての印象でした。今や、革命は、

がら、きいていらつしゃいました。僕は一人でもやりたいほうですが、吉岡さんは、一人で何ができるとみんなを招き入れ、徐々に、テントをスズナリにされてゆきました。セクトが悪いんだ、みんな好きにやればいいんだとおっしゃるものですか、ドフリーってどうやればいいんですかという人まであらわれるんですね。そんなとき、まあ飲みませんか？と議論が始まり、何時間も話し合うことができます。しかし、あの悪名高い連中が現れると、真つ先に、体を張って、テントにも近づけず、色々なディスプレイにも、さわらせませんでした。勿論、市役所の職員や警察など、硬軟織り交ぜた対応で、撃退しました。敵の要求を飲むべきときはのんで、明日のことにさせてしまおうわけです。そうして四〇日たえぬいたわけでしょう。でも、権力と金持ちに盲従する人間を心底にくんでいらつしゃいました。敵が去って、運動の長い歴史のひとつまを克明な記憶で語られ始めると、誰も議論の余地がなくなり、深い安心感のようなものに満たされながら、吉岡さんのペースに乗せられ、同じ土俵にあがるのがあたりまえになっていくわけだったんです。すべての理論は、体で消化しきっているんですね。ただ、違和感は、例のタバコと酒ではありませんでした。

刑務所は、逆にさらなるファイトを燃えさせてくれます。

吉岡さん亡き後、亡くなったからこそ、もういちど、立ち上げたいとひたすら、思っています。これからも手を、知恵

大学では語れず、カフェでしか語れないという状況を刻々確認した日々は、正直に言って、あなたとの親交故にです。

「弱者救済こそ人の道と教えられたが、七〇年代から消滅した」という時代分析はお見事でした。それゆえに私を助け続けて下さっていたのでしょう。

大阪でオキユパイ・テント闘争をするから、大阪へ来ないか、そして、あなたの住まいを知り、大変なひとであることに驚きました。銜学を嫌うあなたこそ、大変な読書家だったのですね。

「きみは、本を大切にしないね」「クマの書くことは、難しく読む気にならん」などと、人を読まれる恐ろしい方であると気づいた時には、遅かった。

この歳になって、ひとの偉さについて真剣に省みることにになりました。あなたのような方が生きられない時代になってしまふことが心配でたまりません。そして、あなたに学ぶことができなくなったことは痛恨のきわみです。

戦後の革命時代の生き字引とも思いました。あなたの孤独について不遜な想像をめぐらしていましたが、人類という発想ができなかったあなたには、孤独も絶望もなかったのですね。一方で、私がチンケな若者に傷つけられたのを知って、人一倍の懲らしめをしようとして、逆に傷ついたので、死を早めたのだと悩みます。

あなたの人間性に回帰すること、善をなすに躊躇しないこ

他者が受けている、被曝を強いるという暴力に心から怒り守ろうとしてくれました。

大阪市役所の監視テントの生活は過酷でした。日々命と健康を削るようにテントを守り、私たちを支え続けて逝ってしまった吉岡さんは、最後の最後まで私を助けてくれました。私は吉岡さんがしてくれたことを忘れません。一生感謝し続けます。

吉岡さんありがとうございます。

監視テント ユーミ

吉岡さん！ ユーミです！

吉岡さんとは、ついこの間の8/6の広島で初めてお会いしました。

その後、北九州や大阪にテントを立ててくれて、とてもうれしかったです。

テントにいくといつも笑顔で迎えてくれて、夜遅くなると泊まっていくんやろ？と勝手に泊まる前提で言ってくれてました。

吉岡さんには、これからも可愛がってもらえるんやろなと思っていました。

まだまだ一緒にいろんなことしたかった。いろんなこと教えてほしかった。

など深く省みることなしには、なにもないとすら感じていきます。

本当に、お世話になりっぱなし、ありがとうございます、ごめんなさい。

監視テント さやさや

さやさやです！

私が吉岡さんに会ったのはオキユパイ大阪のときです。三。一。の後原発事故で私の世界はすっかり変わりました。

日々水や空気や食べ物や自然にまき散らされる放射能と、いつまた爆発するかわからない原発に怯えて暮らすのは耐えられず、大阪原発の再稼働をどうしてもとめたかった。

たくさんの人と再稼働反対と声をあげたあの三六時間は、私の今を支えるものです。

その後北九州や大阪で瓦礫の広域処理反対をみんなで訴えましたが、なぜか瓦礫には反対の人があまり集まらず、とても苦しかった。そんなときに吉岡さんが大阪市役所前にテントをたててくれました。

私はとても嬉しかった。これで瓦礫を、放射能を燃やすのを止められると思いました。

吉岡さんは何度も福島にいき、自分は放射能は怖くなかったのに、私のように子どもたちに、放射能の混じった煙を吸わせたくないという声を聞いて、テントをたててくれました。

ほんとに早すぎますよ！

でも、なにいつてもどうしようもないので、私たちはがんばります。おかしいこと止めさせます。革命起こします。絶対奴らに負けない。

だから、お空の上から見ててください。みんなを守ってください。たまに叱ってください。

吉岡さんに会えてよかったです。

お空の上で、ゆっくりやすんでください。

本当に本当にありがとうございます。頑張ります。

監視テント M

吉岡さん。

私が吉岡さんに初めて会ったのは、大阪でした。

再稼働を止めたい気持ちだけで、何も知らずに行った私みたいなのも、吉岡さんは優しく迎え入れてくれました。

二週間と少しいっしょに過ごして、でもまだ大阪では、吉岡さんは少し遠い人でした。

そのあと、いろんなところに連れていってもらいました。いろんな話をたくさんしてくれました。

マルクス読んだ方がええで？とか、お好きだった山やスキーのこと、伊方では、きれいな海に突如現れた原発の醜悪さに強い怒りを示されました。

学生のころから、どんな活動をされてきたのかも、たくさん聞きました。

その中で、ある時ふと「俺は死んでもええと思ってやってみるんやで」とおっしゃいました。

世の中を少しでもよくするために一生を賭ける、のではなく、命を賭ける、いつ死んでもええと思ってるやうに。

あまりにも大きすぎて、私は、怖くなりました。

すごく深いところが、揺り動かされました。

テントがみんなにとつての拠点となり、ひとりひとりの次の行動につながる場であるように、私にとつて吉岡さんから教わったこと、揺り動かされた部分は、何かあったときに自分の立ち戻る場所になります。

吉岡さん、立ち戻れる大切な場所をありがとうございます。

監視テント A

もじもじ先生 冤罪に

もじもじ先生こと下地準教授も、告別式で弔辞を読まれましたが、一〇・一六の抗議行動で、不当な罪状をきせられ、一二・〇九、逮捕、現在、大阪府警で、事情聴取に臨んでおられます。判事補は、拘留理由を却下しましたが、準抗告を再度、検察がする模様で、未だ、でられません。弔辞の掲載が、できない状況です。

その他、監視テントで浅からぬ親交をいただいた方にも、

弔辞のお願いができず、また、弔辞をして頂いた方々にも、不手際から、原稿をいただけませんでした。

アイヌ民族には、さようならという言葉はないとのこと。す。ちよっと旅に出ているだけだそうですから、また、きつと何らかのお通夜が可能と思います。時空を超えた大対話をまた、テントの中でのよう、いたしましょう！

吉岡同志追悼のために

——吉岡史郎（奥田満）同志追悼——

橋本利昭（革命的共産主義者同盟再建協議会）

①最期の経緯

一月二十七日、前進社関西支社で、突如、倒れる。

仲間によって、大阪市東淀川区医誠会病院に運びこまれ、

SCU (stroke care unit、脳卒中集中治療室) に収容。

診察の結果、脳内出血と判明、左半身が麻痺。やがて意識が回復するとともに、言葉使いは明朗で、意識も鮮明になる。ただし、左腕と左脚に麻痺があり、車椅子に。面会謝絶、絶対安静状態に。

四、五日して症状が固定化したという医師の判断で一般病棟に移る。

二月四日、家族が面会に訪れたとき、大きいいびきをかいて起きない状態になる。CTスキャン(コンピュータ断層撮影)の結果、脳血管が別のところで破れていることが判明。脳幹

を圧迫しており、手術も不可能と判断される。

午後一時一六分、逝去。享年六四歳。

わずか一週間の闘病でしかなく、まさに「太く短く」生き抜いた同志を象徴するような最期であった。

②四五年間、駆け抜けた生涯

吉岡同志は、一九六七年に予備校生として立命館大学の学生運動に参加したことが初めての革命運動への参加であった。一九四九年三月一日、名古屋市千種区に生まれる。

逝去は、二〇一二年二月四日であった。

奇しくも、誕生日が三・一四、逝去の日が二・一四である。

三・一四とは、一九七五年、革共同の本多延嘉さんが反革命カクマルによって虐殺された日である。また二〇〇六年のこの日には、関西の革共同内部で、党内腐敗分子追放、革共同の再生、再建を旨と闘いが始まった日であった。また一八八三年の三・一四はマルクス逝去の日でもある。

二・一四とは、一九七一年に反革命カクマルが関西大学のバリケードを襲撃し、辻敏明・正田三郎の両同志を虐殺した日である。

この両日を自らの誕生日として、逝去の日としたことは、吉岡同志が革命的共産主義者同盟と、革命的左翼を体現したこと象徴である。

③吉岡同志の事績

一九六七年に学生運動、全学連運動に参加してのち、一九六九年、一九七〇年には、京都大学・立命館大学の全共闘のバリケード攻防に先進的に参加。一九六九年にはまた一月決戦を闘う。

一九七一年、新関西空港反対淡路現闘に参加、以降二年間、新関西空港反対を闘う。このとき培われた現闘精神こそ、同志が終生の革命運動で発揮し続けたものであった。

一九七四年一月から一九九八年まで二四年間非公然活動に入る。対カクマル戦争と三里塚・天皇決戦を先頭で闘う。

一九九八年、公然活動を再開後、労働運動、部落解放運動を担う。

二〇〇六年三月一日、腐敗分子追放の先頭に立つ。

二〇一一年三月一日以降、九条改憲阻止の会の闘いの一環として被災地に救援物資を届ける闘いに従事。

二〇一一年九月一日、経産省前テントに参加。

二〇一二年四月、大飯原発再稼働反対監視テントに参加。

二〇一二年九月、北九州ガレキ焼却反対闘争に参加。

二〇一二年一〇月一二日から十一月二〇日の間、ガレキ焼却反対大阪市役所前テントに参加。

④共産主義再建のために吉岡同志が投げかけたもの

国家・党の代行主義と独裁を許さず、また「社会主義」計

「面経済」などという生産力思想をのりこえ、人間解放の思想として、また現実の運動としての共産主義を再建する。

いま問われていることは、吉岡同志の火の玉のような行動力をわれわれ全員のものにすることである。彼はよく、幕末維新の志士の言葉として、「議が多く、行動が少ない」（議論ばかりで行動を伴わない）と語っていた。多くの人が認める彼の存在感とは、このような自らも人をも行動に導く彼の能力に裏打ちされていた。それは同時に、革命運動のあらゆる局面と領域に習熟した経験と理論の蓄積によって可能となっていた。年少の仲間を共同の主体として認め、ともに行動を編み出していく彼の能力に誰もが驚嘆し、うたれたものである。同時に、先輩・指導部・同僚にたいしても厳しく突きつけるものがあった。彼の投げかけたものを受けとめられるかどうかは今、共産主義者たらんとする者すべてに問われている。

K市での思い出

椿 邦彦（革命的共産主義者同盟再建協議会）

今から一〇年ほど前、私は吉岡さんと一緒に郵便局の労働者を組織する仕事に携わっていた。そのころ私は、播磨灘に面した兵庫県のK市を中心に活動しており、私たちが「別荘」と呼んでいたアパートで全通の組合員を相手に学習会などをおこなっていた。そうした場に吉岡さんも大阪から出かけて

来てくれた。彼が来れば必ず飲み会がはじまるのだが、だんだんと調子があがってくると彼は若い郵便局の労働者たちに、熱く「革命」を語り出すのだった。そして「労働者階級は武装しなければならぬ」と少し呂律が怪しくなりながらも真剣に説いていた。私には少々場違いな感じがしていたが、若い労働者たちは始めて聞く話に興味を抱いているようだった。吉岡さんの葬儀で、監視テントの若い仲間たちの話を聞いているうちに、私はあの当時の「別荘」での情景がありありと目に浮かんできた。

彼は、十万人を超える人びとが原発再稼働反対を訴えても、また沖繩でオスプレイ配備反対を訴えても、それを政府が平気で踏みこめるこの政治状況を命がけで打開しようとしたのだろう。昨年九月の経産省前のテント設置から、おおい町テント、そして大阪府役所前のテントにいたる闘いで、彼は文字通り自らの生命を燃焼し尽くした。まさに革命家としての人生を見事に全うしたといえるのだろう。しかし、私にはどうしても、「吉岡さん、まだ早いすぎるよ！」という思いをおさえることができない。

最初の脳出血で倒れる二日前、彼は「最近、鼻血がとまらなくなるんだ」と洩らしていた。吉岡さんは、監視テントに集まってきた若者たちに「闘う者の足を引っ張ってはいけません」と言っていたそうだが、今は引つ張りたくても、掴む足はもはやない。本当に残念でならない。

吉岡史朗君のラストラン

西浦隆男（東大安田講堂闘争被告）

突然の訃報に驚くばかりだった。つい数日前に、大阪府役所前のガレキ焼却反対の監視テントに立ち寄り、話をしたばかりだった。一時一六張りくらいあったテントは、その日には既に大半が撤収し、ひとつだけ残っていた。吉岡君はそのなかにいつものように座っていた。維新・橋下市長のテント強制撤去に向けた動きが刻々と迫っている緊迫した状況。まわりには、工用のバリケードがそこら中に張り巡らされ、ルミナリエ（光のルネサンスとかいうらしい）の工事も行なわれていた。市長になってからこのところ橋下はほとんど選挙のために費やし市政を省みていないが、このバリケード工事には一体いくらかかっているのかと疑問に思った。何日か前には、汚染ガレキを焼却する此花区での説明会を前に反対運動に図書館に集まっていた人が、何の前触れもなくいきなり大阪府警機動隊に襲われ、狙い撃ちされたかのように中心メンバーが逮捕されている。建造物侵入という罪名とのことで、インターネットのユーチューブなどに動画が載せられているが、階段から突き飛ばされるようにして女性が拉致されているくようすも写っている。図書館にいたことがどうして建造物侵入なのか？はたしてそのような罪名で起訴できるのか？と思っていたが、起訴されてしまったとのこと。昨日の夕刊に

も、大阪駅でガレキ焼却反対のピラマキしたという容疑で二名が事後逮捕されている。大阪原発再稼働反対の六月の現地闘争での事後逮捕、閃電前抗議行動での逮捕などとあわせてこれまでに関西では九名が逮捕され、ほとんどが起訴・拘留されている。反原発・再稼働反対・ガレキ焼却反対の市民運動に対する恐るべき弾圧が展開されている。橋下維新の強圧姿勢・安倍自民党政権復帰の予想などに力を得て、大阪府警・地検が政治的・計画的に弾圧を拡大しているとしか思えない。反原発市民運動に対するドーカツ・威嚇という側面も強いと思う。

吉岡君とはここ数年くらいのつきあいだと思う。今年で六回目になった京都・円山公園での一〇・二一反戦反貧困反差別集会や日本赤軍獄中者（無期懲役や長期刑など）の救援・反弾圧集会や講演会などで行った顔面を合わせるようになり、交流会でもよく酒を酌み交わした。葬儀の際にもらった彼の略歴を見ると、彼は七四年から非公然活動を二四年間も続けてきたという。交流会の時や二次会、あるいは合宿の時などに、彼はいろいろと話しを聞かせてくれた。そのなかには、勿論、彼にとっても重い荷物のようなものもあつたに違いないが、彼はその重い荷物も墓の中まで持っていたように思う。

三・一一のフクシマ原発震災の後、彼は福島現地に行っていた。久しぶりに京都で顔をあわせた時、アパートを借りる

時に不実記載でばくられた、といって笑っていた。経産省前監視テントにも最初からかわり、大飯原発再稼働に反対する大飯のテント村にも、大阪市役所前テントにも、いつも彼はいた。まるでテントの主(ぬし)のように。大飯に行ったときも、若者たちを中心にして議論が行なわれていたが、吉岡君は焼酎を酌みながら、彼らの話にしつと耳を傾けていた。彼らの論議を見守りながら、アドバイスをするという姿勢に徹しているように感じられた。

彼の通夜と葬儀の時には多くの若者や女性などが駆けつけ、涙を流しながら、彼の死を悼んだが、いかに慕われていたかを知らされた思いで胸が詰まった。幸せな奴だった。会場は「インターナショナル」と「同志は倒れぬ」の歌に包まれた。若者たちが大飯でのようにジャンベを響かせ、再稼働反対のシュプレヒコールを挙げる中で彼の棺は送りだされた。吉岡君は多くの仲間とともにシュプレヒコールをあげながら駆け抜けて行った。(二〇一二年二月一日)

福田良典(経産省前テントひろば)

吉岡さん。テントで出逢つてからの日々が頭の中を駆け巡っています。

あなたからの一言一言が思い出され胸を締め付けます。今は唯、教えて戴いた言葉を抱きながら、これから前へ進

む決意でいます。

そして今以上に福島への強い気持ちを持って行動することを誓います。

もう「ふくちゃん、元気にしとるか」と呼んでももらえないと思うと僕の活力の源を失った気持ちで一杯です。

吉岡さんにお世辞でも「ふくちゃんがおるから安心して大阪にいけるで」と言つて戴いた言葉にこれまで頑張つてこれ毎日でした。

『ど・フリー』それでいいんや』『あんたが動けば、人も動くんや』その言葉に導かれての毎日です。

吉岡さんの計報に福島での県庁包囲を今はどうするか思案していますが、吉岡さんの顔に失礼のないように心掛けて真に福島の人々の為になるよう行つてきます。

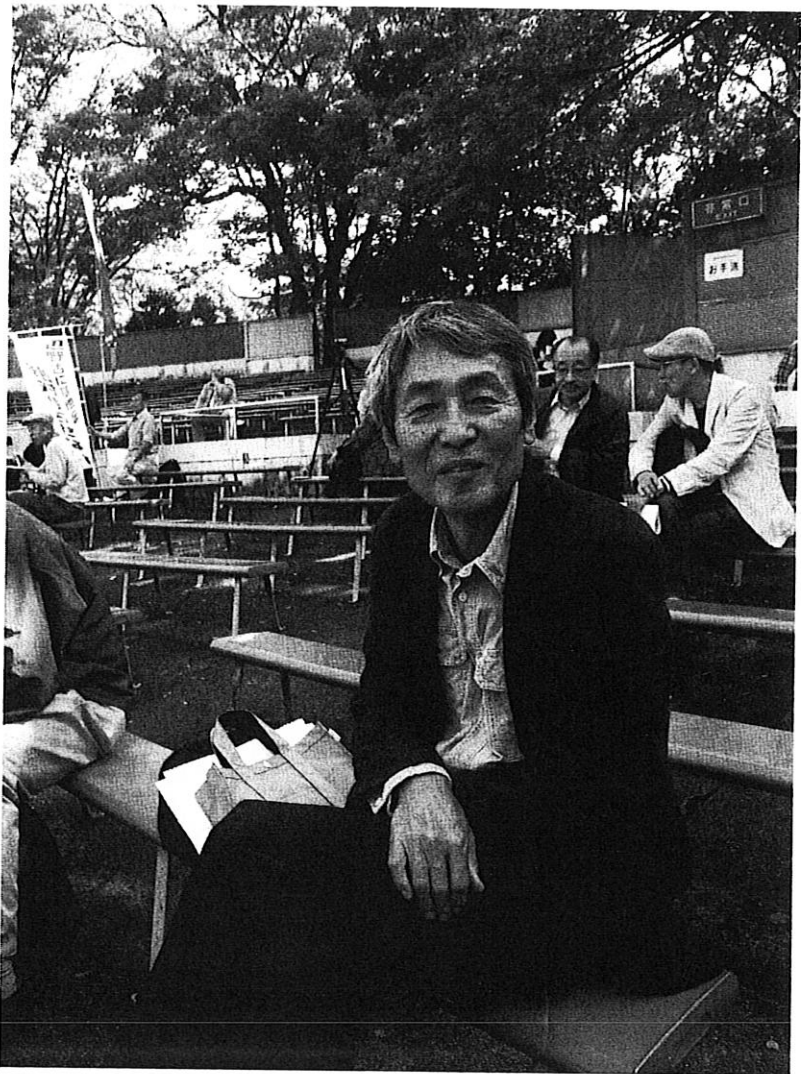
『じじい』の葬式に多くの若者たちが集まっています。まるで東京、大飯、大阪のテントのようです。

これだけ若者たちを鼓舞し、支持を集める「じじい」を僕は知りません。

このことだけで吉岡さんの人柄と生き方が分かります。このことはこれからの僕の新たな目標です。及ぶことは出来ませんが、これに向かつて歩いていきます。

語りたいたことは尽きません。もっと語り合いたかった。教えて戴きたかった。

待つて下さい。(吉岡兄から多くの愛を戴いた弟より)



故奥田満さん 10・21 反戦反貧困反差別集会 (於：京都市円山公園野外音楽堂)